
Tales of Destiny ~ 漆黒の剣士と天の御遣い ~

マツト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Destiny ～漆黒の剣士と天の御遣い～

【Nコード】

N7153M

【作者名】

マツト

【あらすじ】

…漆黒の剣士はある日平穏な日常を壊された。
ただ一人の女性の為に、剣士は…名誉を、仲間を、全てを捨てた。
そして迫った自分自身の運命。しかし彼は後悔をしなかった。しかし、自身の運命を受け入れた哀しき剣士の物語はまだ終わっていない。
かった。

第零話 悪夢と占い（前書き）

連載がまだあるのにどんどん他のアイデアがおもいついてしま
います。

こんなものを考えてみました。まだプロローグですが…

第零話 悪夢と占い

ゴロゴロゴロ……

薄暗い洞窟の中に響く迫る鉄砲水の音がするなか、一人の少年が座りこんでいた。

見た目は黒い髪に男性にしては小柄な体格で薄紫色のウェアにマントをかけた凜々しい感じのたたずまいだった。

「ここも間もなく、水に飲まれる……」

少年は自分の周りと運命を悟り始める。

そして少年は、腰にあった剣を抜いてその剣に話掛ける。

「付き合わせてすまないな……シャル。」

シャルと呼ばれたその剣はレンズの部分が光だし、そして剣から声が聞こえてくる。

『どこまでもお供しますよ。…僕のマスターは坊ちゃんです。』

この剣は意思を持った剣、ソーディアンの中の一つシャルティエである。

ソーディアンとは千年前に行われた天地戦争と言う大規模な戦争の際、製造られた兵器である。

そしてシャルティエは彼にとっては相棒のような存在なのである。

シャルティエの声を聞いた少年は静かに微笑み、壁に背を着ける。

彼の名はリオン・マグナス。かつてセインガルドと言う一つの王国の客員剣士を務めていた。更に彼は、オベロン社と言う会社の総帥の実際の息子であり、将来を有望視されていたのだ。

しかし、彼にはある夢もあった。一つは実の親であり、オベロン社の総帥であるヒューゴ・ジルクリストを越える事…

そしてもう一つ、彼にはこちらの方がより重要だったかもしれないが、『メイドであるマリアンと同じ視線になること』だった。

マリアンと言う女性はリオン専属のメイドでリオンが幼い頃に亡くなった母親、クリス・カトレットによく似た女性である。その事もあってか、メイドの身でありながらも彼の本名を口にするのを許された女性であり、リオンが想いを寄せる相手でもある。

リオンにとってはマリアンと共に自由に生活をするのを夢見ていたが、ある日突然、その夢が打ち砕かれる。

任務が思ったよりも遅くなってしまい、その日の帰還は夜になってしまった。リオンが屋敷に戻ると家にはマリアンを始め誰一人としていなかった。リオンが家の中を散策していると、気味の悪い仮面を着けた父親のヒューゴが現れた。

ヒューゴはリオンを自分の手駒とするためにマリアンを人質にとった。

ヒューゴに従うしか選択権が無くなったリオンはマリアンを助ける為に、セインガルド王国を裏切り、ヒューゴの付き従った。

しかし、ヒューゴはリオンがどれほどの事をしてマリアンを解放しようとしなかった。

ついにリオンはヒューゴに剣を向けるが、ヒューゴの圧倒的な力に敗れてしまった。

ヒューゴは最後にリオンに対して追って来るリオンとかつて旅をした仲間と戦う事を決意させ、足止めを任せた。

リオンは仲間達と戦うが敗れてしまう。そしてヒューゴにとってリオンは用済みとなり、洞窟の中で鉄砲水を発生させた。

リオンは仲間達にを逃がす為にリフトの操作の為に一人残って仲間達に後を託した。

「これで…これで良かったんだろ、マリアン…」

リオンは想いを寄せる女性に声を掛け、眼を閉じる。その瞬間、天井から水が噴き出てきてリオンを瞬く間に飲み込んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ある世界にてこのような占いが発表された。

『白き衣を纏いし天の御遣いと、意思を持つ剣を持ちし漆黒の剣士が流星と共に現れ、乱世を鎮めるであろう。』と…

第一話 天の御遣い（前書き）

めちやくちゃ長いのに、リオンは一回も出てきません。

第一話 天の御遣い

とある荒野の真っ只中…三人の少女が話をしながら歩いていた。

「ねえねえ…愛紗ちゃん、あの占いって信じてる？」

少女の内の一人、桃色の髪をした少女が黒い髪をした少女に問い掛ける。

問い掛けられた少女は呆れた顔で桃色の髪の少女を見た。

「桃香様…もしや、あのような占いが本当に起こると思っているのですか？」

「うん。だって管輅ちゃんの占いは凄いんだもん。きっとあの占いだってきつと現実に起こるよ。」

桃色の髪をした少女が自信ありげに返答する。

「失礼ですが…」

黒い髪の少女はそう言ってから立ち止まって言葉を繋ぐ。

「桃香様は少々夢を見すぎています。『天の御遣い』ならまだ存在するかもしれませんが、『意思を持った剣を持ちし漆黒の剣士』など到底信じられません!!」

「ええ…なんで??」

強く断言をした黒髪の少女に対して、桃色の髪の少女は軟らかく返す。

「な、なんで？つて…そもそも剣と言つのは意思など持っているはずが無いじゃないですか！…も、もし、意思を持ってたりしたら…ゆ、ゆ、ゆ…」

「幽霊つて言いたいのか？」

黒髪の少女が吃っているのを見て、赤い髪をした少女が話す。

「！？り、鈴々！！へ、変な事を言つな！！」

「え、だつて愛紗…幽霊つて言いたかつたんでしょ？…ああ、分かつたのだ。愛紗、幽霊が怖いのだな。」

「！！！？」

赤髪の少女が放つた言葉に黒髪の少女が強く反応した。

「そ、そそそそんな事は、なな無いぞ！！わ、私は桃香様の一家臣。ゆ、ゆゆ幽霊などには…」

「……あ！？あんな所に何かが…」

「ヒッ！？ど、どどど何処ですか、桃香様あゝ」

桃色の少女が見るからに怯えてそうな黒髪の少女をからかう。

そして、黒髪の少女は泣きそうな顔をして桃色の髪の少女を見て、笑っているのを見てからかわれたのに気付く。

「ちょ、桃香様からかいましたね！？」

「あはは…愛紗ちゃんにもやっぱり苦手な物があるんだねゝ」

「にはははゝ愛紗は怖がりなのだ。」

「り、鈴々！？お前まで私をからかうのか！！」

黒髪の少女が怒っている…

「…あれっ?」

桃色の髪の少女が何かを見つけた。

「ん、どうしたんですか? 桃香様…えっ、流星?」

「愛紗、今はお昼だよね?」

黒髪の少女と赤髪の少女が不思議がっていると、桃色の髪の少女が…

「きつと、御遣い様だよ!! 行こっ、二人とも!!」

と、叫びながら走りだした。

「えっ、ちょ、待って下さい桃香様!!」

「にゃ、待つのだお姉ちゃん。」

黒髪の少女と赤髪の少女が急いで追い掛けた。

.....

「んっ…」

白い服を着た青年が眼を覚ます。

(あ、あれ…俺、どうしてこんなところにいるんだ?)

青年は自分が何故このような荒野にいるのかを考える。

(えっと、部活からの帰りで、すぐさまベットに直行して…うーん、それだから全く思い出せん。)

青年が何故、ここにいいのか分からずにずっと考えていると…

「オイ、兄ちゃん。」

突然、声を掛けられた青年が声の方を振り返ると…

目付きの悪い男と、小柄な男と、それとは対象的に大柄で太った男がいた。

「え、えっと…兄ちゃんって、もしかして俺のことですか？」

「他に一体誰がいるんだ。」

青年が聞くと目付きの悪い男が答える。

「そんな事より、兄ちゃん…いい服を着てるじゃないか。」

目付きの悪い男が青年の服を見ながら言う。

「へっ…これ、何処にでもあるような学園の制服なんだけど…この服が欲しいのか？」

「ああ、兄ちゃんの言う学園ってのはよくわからねえが、確かに俺達はその服が欲しいんだよ。…だから、素直に渡してくれねえか？」

…もし嫌だつて言ったら…」

チャキ…

目付きの悪い男は腰にさしていた剣を抜き、青年の首に近付ける。

(！?こ、これ…真剣じゃないか。)

青年の首に当たる鉄独特の冷たさが伝わってくる。

(こ、こんな訳の分かんない所で死んじゃうのかよ。)

青年がそのことを考えていると…

「待てい。」

少女の声が聞こえてきて男達と共に辺りを見回す。

そして青年達の眼に入ったのは黒い髪をした少女であった。

「何だお前は…今アニキは取り込んでんだよ、邪魔するんじゃないよ。」

「邪魔をするんなら容赦しないんだな。」

チビとデクの二人が少女に手をつけようとしたが…

「下がれ、下郎。」

「ヒッ…」

少女の一言で下がる二人。

「貴様等のような下郎が、その方に手をつけるのはまかりならん！
！さっさと立ち去るがいい。」

少女の言葉を聞いたアニキが怒り混じりに言った。

「ああん、姉ちゃんよ…お前さんいきなり出て来てそんな口を聞きたあ…つけあがんじゃねえぞ！コラッ！！」

「貴様が頭か…そんなに言うならばこの私と一対一で戦うのか？」

少女の提案にアニキは笑い…

「へっ、俺の手をわずらわせるまでもない。…オイ、デクやってやれ。」

「わ、分がった。」

アニキの言葉を聞いて、デクが歩きだす。

「お、大人しく…「ハッ！」…グエツ」

ドサツ…

「「デ、デク！！？」」

アニキとチビは自分達の目の前で起こったことが分からなかった。自分達の中で一番大きく、体力のあるデクが少女の一撃で倒れたのだ。

「…まず一人、次は誰だ？頭か？それとも貴様か？」

少女はチビに向かって言葉を話す。

「ヒッ…いい、嫌…お、俺はやらねえ。」

チビが逃げ腰になる。そんなチビを見たアニキが…

「お、おいチビ、お前何ビビってやがる!？」

と、怒鳴りつける。

「だ、だってアニキ…デクをたった一人で倒すような“怪力女”に俺が勝てるはず無いでしょ!？」

……ピキッ

「……怪力女？」

チビの発した言葉に何か変な音がした後、黒髪の少女が小さく呟いた。

その瞬間、少女から殺気が溢れ出る。

「…この私が、怪力女だと…」

その時の少女の表情は、鬼も裸足で逃げ出しそうになるほど怒気が籠っていた。

そして、自分の武器なのであろう…青龍を象った偃月刀を取り出し、チビに向ける。

「え、あ、いや…思ってないです!だから、助け…聞こえんな!」「……グエッ」

チビは少女に対して見逃しを要求しようとしたが、少女は最後まで言葉を話させずにチビを気絶させた。

「オ、オイ！？チビ！？」

アニキがチビに駆け寄ると少女がまた口を開く。

「さて、残るのは貴様だけだが…どうする？仲間を連れ、そのまま逃げるか？それとも、貴様がかかって来るか？」

少女の問い掛けにアニキは悔しい思いを込めながら…

「クツ…分かった。二人を連れて、逃げさせてもらっぜ。」

と言い、チビとデクに声を掛ける。

「オイ！！チビ、デク…何時までも伸びてんじゃねえ、さっさとずらかるぞ。」

そして、男達三人はフラフラになりながらも去っていった。

「……………」

この光景を一部始終見ていた青年は、啞然としていた。そんな青年に少女が声を掛けた。

「…フ…お怪我はありませんか？」

「…えっ？あ、うん大丈夫だよ。」

「そうですか…良かった。」

青年の無事を確認すると少女は、先程までの凄まじい気迫を無くし、落ち着いた雰囲気放つ。

(可愛い娘だな…)

青年は先程とは違う雰囲気少女に思わず見惚れてしまう。

「あの、どうかしましたか？」

少女は青年の視線を感じたのか問い掛けてきた。

「えっ、あーいや、何でも…あの取りあえず助けてくれてありがとうございます。俺は北郷一刀って言います…君の名前は？」

少女は一刀に自己紹介をしてもらい、ようやく自分が名乗って無かったことに気がつく。

「これは、失礼いたしました。姓は関、名は羽、字を雲長と申しま

す。」

「……………えっ？」

関羽と名乗る少女の言葉に思わず目を点にする一刀。

「?どうかなさいましたか？」

関羽が首を捻りながら聞いてくる。

「いや、名前なんだけど…もう一度言ってくれないかな?風でよく聞こえなかったから…」

一刀は適当な理由をつけて、もう一度名前を言ってくれるようにお願いした。

「そうですね、ではもう一度…我が名は関羽、字は雲長と申します。貴方様をお迎えに…」

「ちよ、ちよ、ちよっと待ってくれ！名前が関羽ってどうゆう事！？」

関羽の名を聞いた一刀が驚き慌てて、関羽の話を遮った。

「…どうゆうと申しますと？」

関羽は何故一刀が驚いているのか全く分からなかったため、質問をした。

「いや、俺も関羽って人の事知ってるけど…その人って大昔の人なんだよ。」

「大昔の人…なのですか？しかし、私の知っている歴史にはこの名は出なかったと思いますが…」

「えっ？」

関羽の言葉に信じられないと言った感じの顔になる一刀。

「（関羽の事を知らない？自分が名乗っているのは関羽に対する憧れからかと思ってたんだけど…もしかして…）」

ねえ、ここって…日本だよね？」

一刀はあることを思い浮かべつつ、此処が日本であるか聞いてみる。すると、関羽は…

「『にほん』とは何ですか？」

と、返してきた。

「貴方様がおられた国の事を『にほん』と言うのですか？」
「ん、まあ…そうなのかも…じゃあさ、ここは一体何処なの？」

関羽の考えに少々疑問に思いながらも、一刀は頷き場所を聞く。

「ここは、幽州琢県…あちらに見えるのが五台山で、その麓に楼桑村と言う小さな村があります。」「そう…なんだ…ごめん、ちよつと考えさせて。」「

関羽の説明を聞いた一刀は一時、関羽に背を向けて考え始める。

（幽州琢県って言えば中国の地名のはずで、楼桑村っていえば有名な劉備三義兄弟の生まれ故郷でもあるはずだ。そして、あの娘が三義兄弟の内の一人の関羽を名乗っていると言うことは…）

一刀は持っている自分の記憶を司り、ある結論に答えがたどり着く。

（ここは…三国志の世界なのか？）

一刀は田舎の鹿児島に行った際、祖父の家にあった三国志関連の本を修行の合間に読みあさり、三国志の知識はある程度ならば知っている。よって楼桑村や関羽と言う名前から三国志と同じ世界に来てしまったと考える。しかし…

（関羽って…どう考えても男のはずだよな。）

そう、彼の知識では関羽を始め…三国志の主要人物は殆ど男とされている。

だが、一刀の目の前で関羽と名乗っているのは黒い髪がとても綺麗

な絶世の美女なのだ。

(それに…ただ単にタイムスリップをしたんだっただら言葉が通じるはずが無いから…パラレルワールドに来ちゃったってことなのか?)

そんな風に考えていた一刀に…

「あの、そろそろ宜しいでしょうか？」

関羽が話し掛けた。

「ん、ああ、ごめん…もう大丈夫だよ。」

一刀はそう言っていると…

「愛紗あー…!!」

「愛紗ちゃん…!!」

新たな二人の少女の声が響いた。その声を聞いた関羽が…

「おおお…鈴々、桃香様!!こちらです。」

と返事をする。

「酷いのだ愛紗、暴れるんだっただら鈴々も交ぜて欲しかったのだ!」

赤髪の少女が関羽に対して駄々をこねる。

「何を言っている。お前には桃香様の護衛と言う役目があるだろう。」

「にやは…そうなのだ、お姉ちゃんを護るのがいないと、お姉ちゃんがあつさりやられちゃうのだ。」

「鈴々ちゃん…それひどいよ。」

関羽が赤髪の少女の事を叱ると、赤髪の少女の発した何気ない言葉に桃色の髪の少女が落ち込む。

「ところで…そのお兄ちゃんは誰なのだ？」

赤髪の少女が一刀の存在に気付き、関羽に聞き出す。

「ああ、この方は…「御遣い様だよ！鈴々ちゃん！！」…と、桃香様…まだこの方が天の御遣いであるかは…」

関羽が説明をしようとすると、桃色の髪の少女の自信ありげな声に遮られ、関羽が止める。

「ええ、きつと御遣い様だよ、愛紗ちゃん。だって白い服を着てるし、キラキラ光ってるし、愛紗ちゃんだってこの人とお話して、不思議な感じがしたんじゃないの？」

「ま、まあ…確かに、我々には分からない言語もありましたが…」
「だったらきつと御遣い様なんだよ！！きつと。」

桃色の髪の少女の根拠に少々押されながらも、関羽は肯定する。
そんな中、一刀は…

「あのさ、君達は一体…誰？」

と、二人の少女に問い掛けた。

「あ、ごめんなさい。私の名前は劉備、字は玄德って言います。」
「鈴々はね…姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ。」
「り、劉備に…ちよ、張飛だって!？」
「「??」」「」

二人の名前を聞いた一刀は、またもや驚いた。

「あの、私達の名前がどうかしましたか？」
「えっ? ああ…何でも無いよ。あの…劉備さんちよつと質問してもいいかな？」
「はい、いいですよ。」

驚いた一刀に劉備が質問をしたが、一刀は答え、そして質問を劉備に要請した。

「あのさ、君達さつきからお互いの事を何か違う名前でごんでたけど、それって一体何？」

一刀の質問に少々驚いた表情の劉備。

「御遣い様は『真名』を知らないんですか？」
「真名? いや、知らないな。」

『真名』と言う単語に本当に聞き覚えの無い一刀。そして、劉備が説明する。

「『真名』と言うのは、その人が心から許した人じゃないと呼んではいけない神聖な名前なんです。もしも、見ず知らずの人がこの真名を言ってしまうと斬られて文句がいえな程、失礼な行為に当た

るんです。」

「そうなんだ…じゃあ、もう一ついいかな？」

「どうぞ」

真名の意味を知った一刀は劉備にもう一つ質問を要請して、笑顔で快諾された。

「俺のことを御遣い様って呼んでるけど、それってどうゆう意味？」

「それは、私が話しましょう。」

一刀の二つ目の質問には、関羽が答える。

「少し前に、管輅と言う占い師がこう予言したのです。」

『白き衣を纏いし天の御遣いと、意思を持つ剣を持ちし漆黒の剣士が流星と共に現れ、乱世を鎮めるであろう。』と…」

「な、何だか胡散臭い話だね…」

関羽の話した占い師の言葉に、思わずそう思う一刀。

「そんな事はありません!!」

しかし、劉備はその言葉を力強く否定する。

「管輅ちゃんの占いはすごいですよ!!現にあなたを見つげる前にも流れ星が流れたんです。こんなお昼でも見えるくらい、眩しい流れ星が!!」

「ちょ…ちよっと近いです!!」

先程とは違う剣幕で一刀に近づいた劉備に一刀が注意する。その時に劉備も一刀に近すぎる事に気付き、顔を赤らめる。

「わ、わわわ!?ご、ごめんなさいノノ」

「い、いや…俺こそ大声出して…ごめんノノ」

二人が顔を赤くしていると関羽が…

「…ゴホンツ!…そろそろ話を戻してもよろしいでしょうか。」

咳払いをして二人を注意する。

「あ、ああ…それで君はどうしてその天の御遣いに執着してるの?」

注意を受けた一刀がした質問を聞いた劉備は少し悲しい顔になって語り始めた。

「…私達三人は、人々が暮らしの中で笑っている人が一人もいない事に我慢が出来ずに、少しでも多くの人を救いたいと思って旅をしていました。」

「……………」

劉備の言葉を一刀は黙って聞いている。

「…私の考えに、この二人は賛成をしてくれて一緒に私の考えの実に力を貸してくれました。」

「でも、私達三人の力だけでは救える人も限られてきました。何とかする方法は無いかと思つてた時に、管輅ちゃんの占いを聞いたんです。」

「…天の御遣いと漆黒の剣士が、乱世を鎮めるって?」

「はい。」

劉備の言葉を聞いていた一刀が、占いの内容を言うと劉備は頷く。

「それを聞いた時に私は、これなら人々を助けられるかもと思って流れ星が流れるのをずっと待ってたんです。

そして今日…ようやく流れ星が降ってきて、私は御遣い様が降りて来たんだと思って、走り出しました。

そして降った所には、あなたがいたんです。だからあなたがきつと天の御遣い様なんですよ。」

劉備は自信満々にそう宣言をした後、頭を下げた。

「え、ちよっ…何を…」

「と、桃香様!？」

一刀と関羽が劉備の突然の行動に驚いているが、劉備は気にせず言葉が続ける。

「どうか、私達に力を貸してください!!」

劉備のお願いに茫然とする一刀だったが、すぐに意識を取り戻した。

「…あ、あのさ…期待をして貰って悪いけど…俺はそんな天の御遣いだなんて、そんな大層な物じゃ…無いんだよ。」

「…えっ!?!」「」

一刀の述べた言葉に、劉備と関羽は勿論、張飛まで驚く。

「俺はもともと、日本って言う国に住んでいる普通の学生…えっと、言うんなら一般民とおんなじ人間なんだ。」

そんな人間が：乱世を鎮める為の存在の一人？正直、信じられないよ。」

「この国に来たばかりで、現状がまだ分からないとゆう事ですか？」

一刀の言葉を聞いた関羽が質問をする。

「うん…：そうゆう風にも言えるけど…：俺の居た国は君達の国よりも、ずっと平和だったんだ。人々の殺し合いはおるか…：さっきの三人がやっていた略奪も、少なくとも俺の周りでは起こらなかった程なんだ。」

「…本当に平和な国なのだな。」

一刀の国を想像していた張飛が言葉を漏らす。

「だから俺は関羽さんのように強いつてわけじゃないし、戦いに関する知識も全く無いんだ。…：俺が居たとしても君達の足手まといになるだけだと思っんだ。」

「…：……………」

一刀の言葉を聞いた三人は悲しい顔をする。

一刀自身もひどいことを言っているとは思っ…：しかし、変に期待をされて後でショックを受けるよりは良いと一刀は考えたのだ。

「…：確かにそうかもしれませんが。」

一番最初に口を開いたのは関羽だった。

「「愛紗あし！！？」」

始めに口を開いた関羽の言葉に驚く、劉備と張飛。

「…桃香様、無理強いと言つのも、彼の迷惑でしょう。さ、行きましよう。」

「…で、でも愛紗ちゃん…」

関羽の行動に戸惑う劉備。

「桃香様!!ここで立ち止まっている間にも、多くの人々が苦しんでいるですよ!!」

「!!!?!」

関羽の叫びに劉備は眼を見開く。

この時に関羽の瞳が少し潤んでいるのを一刀は見逃さなかった。

(この娘も…天の御遣いの事を期待していたんだ…。)

「…そうだね、私達だけでまた頑張る…」

そう言つと劉備は一刀に近付く。

「ありがとうございます…貴方に会えた事で私、もっと頑張れる気持ちになれました。貴方の国のような平和な世界にするよう頑張りますから、貴方は私達の名前をどこかで聞いたら応援をして下さい。」

そう言つと劉備は礼をして…

「それじゃあ…また逢えると思えません…さようなら。」

関羽と張飛を連れて歩き出した。

（なんて悲しい眼をしてたんだ…そんなに占いに期待したんだな。）
自分が彼女達の中にいたとしても足手まとい…その事は間違いない
だろう。だが…

「（女の子が泣いているのを黙って見逃す程、俺は薄情な奴じゃないんだ。）…待ってくれ!!」

一刀は叫びながら劉備達を追い掛けた。
叫びを聞いた劉備達三人は、立ち止って振り向いた。

「あの…何か？」

劉備は首を傾げて聞いてくる。

「…天の御遣いって奴、それって大義名分に繋がるのか？」

一刀の質問には関羽が答えた。

「それはそうでしょう…今や人民は、救いの手を待ち望んでいるのですから。」

その関羽の答えを聞いた一刀は、すぐに言葉を繋げる。

「君達に協力をしてくれる義勇兵もたくさん集まるのか？」

一刀のこの質問には張飛が答える。

「勿論たくさん集まるのだ…でもお兄ちゃん、そんな事を聞いてど

うすんの？」

張飛の疑問に一刀はすぐに答えた。

「ならば、俺も一時的でもいいから連れてってくれないかな？」

「……えっ？」「」

一刀の頼みに思わず声を出してしまう三人。

「え、えっと……それってどうゆう事ですか？」

劉備が訳も分からなかったので質問をしてきた。

「だからさ、君達の夢の為に俺を天の御遣いとして使って義勇兵を一人でも多く集めて欲しいんだ。」

「……でもお兄ちゃんは天の御遣いじゃ無いんですよ……」

一刀の出した提案に張飛が心配する。

「確かに張飛ちゃんの言う通り、俺は御遣いじゃないかもしれない。でも、君達は流れ星が降った所に俺がいたから、天の御遣いだと思っただんでしょ。」

「は、はい。」

劉備が一刀の言葉に頷く。

「なら、それを見た事を村の人達とかに話して、君達の夢に力を貸してくれる人を一人でも集めて欲しいんだ。」

……そして、俺が用無しになったり、足手まといだと思っただら捨ててくれて構わないから。」

「しかし、貴方は本当にそれで宜しいのですか？貴方を祭り上げた
だけ上げて、用が済んだら捨てて良いなど…」

一刀の言葉に関羽は心配な表情を隠そうとしなかった。

「ああ、構わないよ。俺は…可愛い女の子達が悲しい顔をしてるの
を黙って見過ごす程、薄情じゃないんだ…」

「…えっ？」

「にはははは、可愛いって言われたのだ」

一刀の言葉に劉備と関羽は驚きを隠せず、張飛は可愛いと言われた
事に笑っていた。

「か、可愛いなど…そんな、へ、変な事を言わないでください！！」

関羽が二人の内では一番に意識を一刀に叫ぶ。

「え、だって…そう思ったから素直に言っただけなんだけど…何か
気に障った？」

一刀はどうして関羽が怒ってるか分からなかったので聞いてみた。

「そ、そうゆう女々しい言葉は…桃香様のような本当に可愛い人が
相應しい言葉で…私のような武一辺倒な者には…」

「いや、関羽さんも本当に可愛いと思ったから言ったんだけど…あ
あ、関羽さんって、そうゆうキャラ？」

「『きゃら』とは、何ですか！！そのような言葉で言われても、私
達には分かりません！！」

関羽は恥じらいも、自分には可愛いなど言う言葉は似合わないと言

って、一刀は関羽がどんなキャラなのか何となく分かった。因みに、劉備は最初に可愛いと言われた時から赤くなっていて話に参加することが出来なかった。

「…話を戻すけど、俺は少しでも君達の支えになりたいと思ったからこう言ってるんだ。」

「「「……………」」」

真剣な顔付きになった一刀は話を戻し、劉備達も真剣に聞いている。

「とは言っても、さっきも言ったように俺は武が優れている訳でもなければ、頭がいい訳でも無いんだ。」

…でも、そんな俺でも助けられる人がいるかもしれない事を君達は教えてくれたんだ。って俺は劉備さんのような全ての人々を助けようなんて思っただけだね。

それでも、俺は自分が助けられるだけでも人々を助けたいんだ。

…って、ちよつと格好つけすぎかな？」

一刀はそこまで言うした後頭部をかいて苦笑した。

しかし、劉備達は眼を輝かせていた。

「そんな事ないのだ！！お兄ちゃん、とっても格好良いのだ！！」

張飛が一刀を大評価をした。

「ええ…桃香様以外にも、貴方のような人にお会い出来て…私も感動いたしました。」

関羽も一刀の言葉に感動をしていた。

そして劉備は…

「じゃあ、私達の理想の支えになってください。…御遣い様。」

一刀の手を握ってそう言った。

「ああ、俺も支えになれるよう頑張るよ…劉備さん、関羽さん、張飛ちゃん。」

一刀も劉備達に対して笑顔で答える。
すると劉備は片膝を着いた。

「え、りゅ、劉備さん何を…」

「桃香です。」

「…えっ？」

急に膝を着いた劉備に一刀は焦り、劉備は自分の真名を名乗った。

「私の真名です。これからは桃香と呼んでください…ご主人様。」

「ご、ご主人様ああ〜！！！！？」

劉備の『ご主人様』と言う言葉に今まで以上の大声をあげた一刀。

「ちよつと劉備さ…桃香です！」「…と、桃香…さん？あのご主人様って言うは一体…」

「御遣い様は、これから私達の主となってほしいんです。それでご主人様って呼んだんですけど、嫌ですか？」

劉備は理由を一刀に話して、首を傾げる。

「い、嫌ではないけど…」「じゃあいいよね」「…でも、関羽さんや

張飛ちゃんが納得をするか…」

そう言つて一刀は関羽と張飛を見るが…二人とも笑顔を浮かべて…

「姓は関、名は羽、字は雲長…真名を愛紗と言います。これからは愛紗とお呼びください、ご主人様。」

「鈴々はね…姓は張、名は飛、字は翼徳…真名は鈴々なのだ。」

自分達の真名を一刀に教える始末である。

「ちよつ!!二人とも、自分たちの主が俺に主になってくれつつてるんだぞ…止めないか!?!」

一刀が二人に言うが…二人は笑顔を絶やさぬまま…

「桃香様が宜しければ…私には否はありません。」

「鈴々も、お兄ちゃんならいいのだ。」

と言つてきた。

「いや、でも…君達の真名を受け取ってもいいのかと…」

その言葉に桃香が答えた。

「いいんですよ。愛紗ちゃんも、鈴々ちゃんも、ご主人様の事を信頼しているからこそなんですから。」

桃香の真つ直ぐな笑顔に見惚れてしまふ一刀だったが…

「分かった、そうゆう事なら真名を受け取るよ…桃香さん、愛紗さ

ん、鈴々ちゃん。」

と、三人の真名を受け取るにしたのだが…桃香達三人は何故か不満そうな顔をする。

「ど、どうしたの？」

「刀は何故、不満がるのか分からず理由を聞く。」

「“さん”は要らないよ、ご主人様。」

「私も出来たら呼び捨てで…」

「鈴々、それだと子供扱いされてるみたいで嫌なのだ。」

全員が呼び捨てを要求してきた。

「…わ、分かったよ。よろしくな、桃香、愛紗、鈴々。」

「うん よろしくね、ご主人様。」

「よろしく願います、ご主人様。」

「よろしくなのだ、お兄ちゃん。」

上手い具合に纏まった四人は…

「にゃ？…あれ、何なのだ？」

鈴々が見つけたのは…

「流れ…星？」

「ですが、あんな黒い流れ星、見た事ありません。」

そう、黒い流れ星を見つけたのだ。

それを見た桃香は…

「きつと、剣士さんが来たんだよ！行こう、ご主人様、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん！！」

流星が落ちた所を目指し、走って行った。

「え、ちよつと！桃香様！？」

「にやははは…また現れたのだ。」

「おい待てよ、桃香！！」

三人も桃香を追って、走り出した。

第一話 天の御遣い（後書き）

次回、いよいよリオンを出したいと思います。

第二話 『漆黒の剣士』で逢いましょう。

第二話 漆黒の剣士(前書き)

リオンのキャラが全然違ってしまいました。
と言うか、長く書きすぎた。もうへ口へ口です。

第二話 漆黒の剣士

「全く、情けねえぞお前等…」

先程まで愛紗にやられていた賊達のアニキはやられたチビとデクを見て、呟いた。

「い、いやアニキ、あの女の力は本当、ハンパないんすから。」

「そ、そうなんだな…すごい痛かったんだな。」

痛みを実感しているチビとデクはその痛さを訴える。

「だからとは言え、女にやられるとは…お前等なさけねえぞ。」

「そ、そんなに言うならアニキがやったらよかったじゃないですか
！！！」

「そ、そうなんだな…アニキは全く戦わなかったんだな。」

アニキの言葉にチビとデクが反論をした。

「う、うるせえ！！俺は分って奴をわきまえたんだよ。」

アニキは突然、反論をされるとは思っていなかったので、適当に理由を述べた。

「そ、それって単なる言い訳…「な、なあ…」あ？どうしたんだよ、デク。」

いきなりデクに声を掛けられたチビは、少々苛立ちげに返す。

「あ、あれ…何なんだな？」

デクが指を指すとそこには…

「な、なんだ…あの流れ星…」

「黒くつて、なんか…ヤバイ感じっすよ」

黒い流れ星が昼の空に流れていた。さらに…

「オ、オイ…段々こつちに近付いて来てないか？」

「そ、そんな…気のせいじゃないっすか？」

「そ、そうだな…気のせいだよな…」

アニキが流れ星が自分達に段々近付いて来ていると感じるが、チビの言葉で気のせいだと思いつい込む。

しかし、またしばらくして…

「や、やっぱり近付いて来てやがる！！」

「に、逃げるんだな…」

流れ星はどンドン、三人に近付き、デクが逃げる事を提案したが、既に遅かった。

流れ星は三人の三メートル付近に落ちた。

「…うわあああ…！！………」

瞬間に三人の視界が奪われる。

「…ん………」

荒野の真っ只中で、黒髪の少年…リオン・マグナスは目を覚ます。

『あ、坊ちゃん…目が覚めましたか？』

リオンが目覚めると、彼の愛剣…ソーディアン・シャルティエが声を掛ける。

「シャル…僕は一体、どうしてこんな所に…」

リオンは自分の記憶を司る。

マリアンをヒューゴに人質に取られて…かつての仲間達との戦いの後、仲間達を逃がす為に一人残って、鉄砲水に飲まれて死んだはずだった。

『分かりません…僕も一体どうしてこんな所にいるのか…』

彼の相棒でもあるシャルティエも何故、ここにいるか分からなかった。

「…それにしてもここは何処なんだ？こんな地形は見た事がないぞ。」

リオンは辺りを見回してみると…そこは今までに見たことが無かった地形の真っ只中だった。

「シャル…この地形に見覚えがあるか？」

リオンがシャルティエに聞いてみるが…

『さあ…このような地形、天地戦争時代の地形とも異なっているようです。』

シャルティエも分からない様子だった。
するとその時…

「オイ、そこのお前!!」

突如、声を掛けられたリオンがその方向を振り向くと…
アニキとチビとデクが立っていた。

「何だ、お前達は…」

リオンがそう聞くとアニキが口を開いた。

「おうおう、怖い顔をしちゃって…早速だが、お前の持っているその剣を俺達によこしな。」

「何だと…」

アニキの言葉にリオンは不思議がる。

「お前の持っているその剣を渡しなって言ってるんだよ。命が助かりたけりゃあな…」

どうやらアニキ達は視界が戻った後、見つけたリオンの持っていたシャルティエを見つけ、彼から盗もうとしていた。
そしてアニキは腰の剣をリオンに向ける。
するとこのリオンは…

「貴様等…盗つ人が、お前達のような奴等にこの剣が渡せるものか…」

と言って冷ややかな笑みを浮かべる。

これに怒ったアニキ達は…

「おい！！いい気になるんじゃないぞ、“チビ野郎”！！そんなに死にたいようだな。」

「今日の俺達は、あの怪力女にやられて苛ついてんだ！！てめえのような“チビ”相手でも手加減をと思うじゃねえぞ！！」

「そ、そうなんだな…“チビ”は素直にするのがいいんだな。」

と、言葉を述べる。

この言葉で彼等は自分達の寿命を縮めてしまった事に、彼等三人はこの時まだ気付かなかった。

『あ…この三人、坊ちゃんの触れちゃいけない所に触れちゃった…』
シャルティエが心配をしているのは当然である。
リオンは小柄な体格に対してコンプレックスを抱いていて、その事に触れると…仲間内でも恐れられた程に激怒する。

「…おい、貴様ら…今、僕の事を何と言った。」

リオンが今までのクールな雰囲気とは違い、明らかに怒気を漂わせている。

「チ、チビって言ったんだよ…だから何だっただ。」

アニキの言葉を聞いたリオンはこう言った。

「…そうか、ならば……切り刻む!!」

その瞬間、リオンはシャルティエを抜き、驚異的なスピードでチビを目掛けて走りだした。

「な、速え!?!」

その速さは、常人の目では捕らえるのがやっとの速さで、気付いた時にはリオンはチビの目の前まで来ていた。

そして、リオンは走りながらもシャルティエを構え、チビを切り抜けた。しかし、それだけでは終わらず…今度はそのまま斜め後ろにチビを切り上げた。

「空襲剣!!」

リオンは特技の名前を叫んでその特技を、チビに放った。

「グエツ…」

空襲剣をまともに受けたチビはそのまま倒れ込んでしまった。

「チ、チビ!!?!」

一瞬の内に何が起こったのか分からず、アニキはチビに叫ぶ。

「ふん、雑魚が…次は一体、誰だ?」

リオンがそう言ってアニキとデクに向き直る。

「デ、デク…何やってんだ！早く奴を片付けろ！！」

「わ、わがっだ…」

アニキに言われ、デクが前に出る。

「お、俺にはそんな剣は効かないんだな…おとなしくするんだな。」

そう言っただけは構える。その姿を見たリオンは…

「シャルの性能が、敵を斬るだけだと思っな。」

そう言っただけ、シャルティエを自分の後ろに構え、小さく何かを呟き始めた。

その時、シャルティエのレンズが光り始め、やがて光がレンズ一杯になると、デクの方にシャルティエと持っていたダガーを十字に重ねて向けた。

「碎け…『ストーンブラスト』！！」

リオンがそう言っただけ、デクの周りに複数の石つぶてが浮き上がり、デクを目掛けて石つぶてが飛んだ。

「グヘッ！…アウツ…」

全ての石つぶてに当たったデクは気を失った。

「デ、デク！！？…お、お前…よ、妖術使いだっけのよ？」

リオンの起こしたことを間近で見たアニキは、驚きで顔を隠せなかった。

「妖術？…今のは“晶術”だったんだが…それよりも貴様、まだ僕に刃向かうつもりなのか？」

「へっ？…」

リオンの言葉にアニキは間拔けた声で答える。

自分の周りにはチビとデクが転がっており、その二人をやったりオンは、シャルティエの剣先をアニキに向けている。

この状況を見てアニキは、自分の置かれた立場が分かった。

「ヒッ…ヒイイイイツツ！！た、たたた…助けてくれえええ！！……」

そう言つてアニキはへっぴり腰になりながらも、その場を逃れようとした。

その姿を見たりオンは…

「貴様は…僕に対して、言つてはいけない事を言つたんだ。それなのに、逃げるとは…哀れだな。」

と言い、シャルティエを下に構えた。すると、シャルティエの刃の部分が白く光り出した。

そしてリオンは、シャルティエを振り上げる。

「魔神剣！！」

リオンがそう叫ぶと、振り上げたシャルティエから青い光が放たれた。そして、その光がアニキに向かって真っ直ぐに飛んだ。

「ゲエツ…」

光に当たったアニキは、そのまま倒れ込んでしまった。
リオンの特技の一つ…「魔神剣」…剣圧を具現化して、飛び道具として相手に攻撃する特技である。

「…雑魚は雑魚らしくしている。」

リオンはアニキとは反対の方向を向いて言った。

『でも坊ちゃん…これからどうしましょう?』

シャルティエが心配の声をあげる。

『この三人、しばらくは起きそうにありませんからここが何処かも聞けませんよ。』

シャルティエの言う通り三人を見ると、完全に伸びており話が聞ける状態では無い。

そしてリオン達はここが何処なのかは全く知らなかった。

「取り敢えず歩くぞ…少しぐらい歩けば、村ぐらいは見つかるだろう。」

リオンがそう言って歩こうとした時…

「あ!あの…待ってください!」

後ろから女性の声が聞こえてきた。

リオンが振り向くとそこには、桃香と愛紗、鈴々、そして一刀がいた。

「何だ、お前達は…こいつ等の仲間か？」

リオンは地べたに倒れている三人を指差し、問い質した。

「いいえ、違います。…この人達をやったのは貴方なんですか？」

リオンの問い掛けに桃香が答える。

「…僕の事を侮辱したんだ。このぐらいは当然だろう。」

「なっ！？これを一人でやったと言うのか。」

リオンの言葉に愛紗は驚愕する。

先程から愛紗は、リオンの立ち居振る舞いからただの少年では無いと感じていた。賊の相手を一人でする所では、武で言うならば愛紗と並んでもおかしくは無い。

リオンの言葉を聞いた愛紗は、リオンの実力を改めて知った。

「それよりお前達は誰かと聞いている…いい加減に答えて貰おうか。」

リオンは少々苛立ちげに言葉を放った。自分の主の前でのリオンの態度に愛紗が迫ろうとしたが、桃香に止められる。

「ごめんなさい、剣士様…私の名前は劉備玄德と言います。」

「私は関羽雲長だ。」

「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

「俺は北郷一刀だ。」

桃香達はそれぞれ自分の名前を名乗った。

四人の名前を聞いたリオンは…

「劉備…関羽…張飛…北郷？なんだその変わった名前は？」

「……えっ？」

首を傾げた後に、声をあげた。その声に対して声をあげたのは一刀だった。

「？…どうしたんだ。」

リオンが一刀に問い掛けてくる。

「いや、お前…劉備や関羽、それに張飛って名前に聞き覚えとかないのか？」

「？…僕はこんな名前、初めて聞いたぞ。」

一刀に対して、真顔で言うリオン。

「…（劉備達の名前を知らないって、一度くらいは聞いてても不思議は無いと思うけど…）あのさ、そっちも名前…教えてくれないか？」

一刀の言葉にリオンは静かに口を開き、

「…リオン・マグナスだ。」

と名乗った。

「りおん・まぐなす？…ん、私達からしてみたら、そっちの方が変な名前だと思うんだけど…」

桃香が、うん…と言う感じに首を傾げた。

『坊ちゃんの名前を変だなんて…何て失礼な!!』

突然、シャルティエが桃香の言葉に怒る。長い間、リオンと行動を共にしていた彼のこと…マスターであるリオンの事を変だと言われた事が彼の怒りに触れたのだろう。そして、シャルティエが喋った後に一刀が驚いていた。

「にゃ?どうしたのだ、お兄ちゃん。」

一刀の異変に気が付いた鈴々が一刀に聞いてくる。すると一刀は驚いた顔のまま言った。

「り、鈴々…お前、何も聞こえなかったのか?リオンの持っていた剣からの声を…」

『「な、何だと(だって)!!!?」』

一刀の放った言葉に、リオンとシャルティエが同時に驚く。

「おい、お前!!今のこの剣の音が聞こえたのか!？」

リオンが今までに無いような剣幕で一刀に迫る。

「えっ!?!…あ、ああ確かに聞こえたんだ。若い男の音がその剣から…」

一刀は驚きながらもリオンに返答する。

「どうゆう事なんだ、何故ソーディアンマスターでも無いお前が、シャルの声を聞けるんだ!!」

リオンも驚きの余り、声を少々荒々しく言う。
そんな中で答えたのが…

「きつと、ご主人様が天の御遣いだからだよ！」

桃香だった。

「…天の御遣い？何なんだそれは？」

リオンが聞き慣れない単語に、疑問を抱いた。
その疑問に一刀が答える。

「えつと…この世界の占い師が予言したみたいなんだ。

『天の御遣いと意思を持った剣を持ちし漆黒の剣士が、乱世を鎮める』って。」

「意思を持った剣とは…どう考えてもソーディアンの事だろうな。」
『そうとしか考えられないですね。』

リオンの言葉にシャルティエも同調する。

「それよりもお前、さっき『この世界』と言ったよな…と言つことは、お前は別の世界から来たと言うのか？」

「ああ…恐らくお前も、違う世界から来たみたいだな。」

リオンの問い掛けに一刀が肯定し、一刀はリオンもまた違う世界から来た事を感じた。

「声が聞こえたならばシャルの事を紹介してやろう。これはソーディアンの一つ、シャルティエだ。」

リオンはシャルティエを差し向け、シャルティエの事を教える。

「なあ、リオン…さっきから気になってたんだが…ソーディアンって一体何なんだ？」

一刀はソーディアンとは何か分からず、リオンに聞いてみる。

『ああ、それは僕から話します。』

リオンの代わりにシャルティエが説明を始める。

『ソーディアンと言うのは、僕達の世界での大昔に行われた天地戦争と言う、大きな戦争の際に造られた兵器なんです。』

「…天地…戦争？」

「……??」

シャルティエの言う天地戦争を復唱する一刀。その一刀の言葉に首を傾げる桃香と愛紗と鈴々。

『天地戦争とは、僕達が所属していた地上軍と、空中都市と言う都市を用いていた天上軍が行っていた戦争です。』

「ああ、成る程…そう言う意味だったのか。」

シャルティエの説明に意味を理解した一刀。するとそこに…

「ねえ…ご主人様。」

桃香が聞いてきた。

「ん？どうしたんだ、桃香。」

一刀が聞いてみると、桃香は少々困った顔付きで…

「あのぉ…出来たら、後で私たちにも話の内容教えてくれないかな？私たちにはシャルティエ…さん？の声が聞こえないから…」

と言ってきた。

桃香達三人にはシャルティエの声は聞こえないので、一刀が何を聞いているのか気になったようだ。

「ああ、話が終わったらまとめて教えるよ。」

と一刀が返事をして、またリオン達に向き直る。

『話を戻しますが…天地戦争での始めの戦況は僕達の地上軍が圧倒的に不利でした。』

その不利を覆すために開発をされたのが、僕達ソーディアンでした。

「…そうか、ソーディアンはいわゆる救世主みたいなもんなんだな。」

「まあ、少し公ではあるが確かにそうだろう。」

シャルティエの説明を聞いた一刀にリオンが補足する。

「でもさ、何でシャルティエは剣なのに言葉が話せるんだ？」

一刀がシャルティエにそう質問をしてくる。その後ろでは桃香がう

んうんと頷いている。

『それは、僕達ソーディアンの元々の使い手の人格をコアクリスタルと言う所に点射したからです。』

「シャルティエの元々の人格って…シャルティエ自身か？」

「そうだ。シャルにとっては、自分がもう一人いるようなものだ。」

一刀の言葉にまたリオンが頷く。

シャルティエの話がある程度聞いた一刀は、桃香達に話の内容を教える。

「へえ、シャルティエさんが地上軍って言う所の救世主って言うてた理由が何となく分かったよ。」

「うん、ソーディアンは凄いのだ！」

「確かに…ソーディアンも凄いが、圧倒的な不利な状況の中でも戦おうとする地上軍の者達も相当な気概だったようだな。」

一刀の説明を聞いた三人は、それぞれの感想を述べる。
そして…

「あのさりオン…もし良ければだけど、俺達と一緒に来ないか？」

一刀がリオンに声を掛ける。

「何…？」

これにはリオンも驚いた表情をする。

「俺達に力を貸して欲しいんだ…この桃香の、劉備の理想の為に。」

そう一刀が言った後にリオンは劉備に向く。

「…ひとつ聞こう、劉備。」

「は、はい。」

いきなり声を掛けられ、桃香は慌てて答える。

「お前の目指している理想とは…何だ？」

リオンにそう聞かれ、桃香はすぐに答える。

「大陸の力の無い人々を救いたい」と言う桃香の理想を聞いたリオンは…

「…フツ、…たいした夢物語だな。」

そう言って、鼻で笑った。

「…夢…物…語…」

リオンの言葉を聞いた桃香は自分の理想を夢物語と言われた事にショックを受ける。

そして、愛紗と鈴々は…

「貴様ア！！桃香様の理想を夢物語と侮辱するとはどうゆう事だ！！」

「そうなのだ！！この国のことを何にも知らないくせに、お姉ちゃんを悪く言うなのだ！！」

と言って、リオンに武器を向けていた。

それを見たりオンは、焦りもせずに言葉を続ける。

「ならば聞くが、お前達は大陸の人々を救う為に、一体何をしよう考えている？」

リオンのその問いに鈴々は少々迷ったが、愛紗ははっきりと答えた。

「決まっている！！国を興し、そこを基点に桃香様の理想を実現させるのだ！！」

愛紗のその答えにリオンは…

「…話にならないな。」

と、呟いた。

「な、何！？は、話にならないとは…どうゆう事だ！！」

愛紗の驚きをよそに、リオンが言葉を繋げる。

「国を興すと言うが…国を興す為には、まずそのもとなる地盤を侵略をすることになる。

…国を取られてなるものかと、防衛側の国は兵を備える。

そしてそこから、国取りの為に戦争が起きる。

戦争は総大将の采配一つで兵士達を…はたまた、住民達を死へと追いやる事にもなるんだぞ。」

「！！！！！！」

リオンが言いたい事が何なのか分かった桃香と愛紗は、驚いた顔になる。鈴々は余り分かっていなかったが…

「兵士達が死ぬことで兵士達の家族は悲しみ、住民達は侵略をして来たお前達の軍に殺されてしまうのだぞ。そんな事をしている奴が『大陸の人々を救う』だと？夢を見るのも大概にしろ！！」

「……！！？」

リオンが凄まじい剣幕で叫ぶと、三人は驚く。
そして、リオンは一刀に顔を向けて…

「北郷：お前にも一つ聞いておこう。お前の居た世界で、劉備のような『戦争をしながらも人々を救いたい』と考えていた者がいたのか？」

と、質問をしてきた。その問いに対して一刀は…

「…いや、居なかったな。桃香のような事を考えた人は俺の知っている歴史には居なかったよ。」

と、考えながらも答える。

「それなのに、お前はどのようにこいつ等と共に居るんだ？叶いもしない理想にわざわざ付き合う事は無いだろう。」

リオンの言葉に顔を俯かせる一刀…しかし、直ぐに顔が上がって言った。

「確かに桃香達の理想は叶わないのかもしれない。でも…俺はそんな理想を持っている桃香を少しでも助けて行きたいって思ったんだ。と言っても、俺は桃香のように『大陸の人々』って言う大きさの程は救えないって考えてるけど、でも俺は…自分が助けられるだけでも救っていききたいんだ。」

「ご主人様……」

一刀の言葉を聞いていた桃香は小さく呟く。

「戦争で死んでいった人達に対しては、俺がその人の死に後悔が無かったように全力を尽くしていい国を作る事がその人の…その家族に対しての償いにしたいから。」

「……………」

一刀の言葉を聞いていたリオンはふと、このような事を思う。

「（こいつの馬鹿っぷりは、あいつ並かもしれん…）」

リオンはかつての仲間の中で一人の男と一刀の面影が重なって見えた。

スタン・エルロン…

彼は…困っている者を見捨てて置けず、相手の為に自分の身を犠牲にしても助けようとする。

そして彼は、一度裏切ったりリオンをまた仲間に加えようとしていた程のお人よしでもあった。

そして一刀も、桃香達の事が放って置けないために、桃香達と行動を共にしているのだ。

そんなお人よしにリオンは…

「ハハハ…お前は馬鹿か？それでお前の分の人々も護れずにお前が

死んだらどうするんだ？」

と、リオンは笑いながら問い掛ける。

「それでも構わないさ、俺は自分のした事に後悔は無いから…たとえ一人も救え無かったとしても、桃香達の手伝いが出来たことを自分の誇りと思うから。」

「…ご主人様（お兄ちゃん）…」「」

一刀の言葉に心を打たれた桃香達。
そして桃香がリオンに向いて話す。

「うん、私も戦争で死んでしまった人達分だけ更に頑張って、その人達にも償っていきます。…ご主人様と一緒に私達もきつと出来るから。」

その言葉を聞いたリオンは…

（こいつも、何と言う馬鹿だろうな…）

と思った。そして…リオンが口を開く。

「いいだろう…お前達の理想が何処まで叶えることが出来るかを見てやるう。」

「…えっ…？」「」

リオンの突然の言葉に目を丸くする四人。

「僕はお前達の事に興味を持ったんだ。お人よしの馬鹿二人が自分の理想を何処まで実現が出来るかな…」

しばらく四人が固まっていたが…一刀が始めに口を開く。

「…ああ、桃香達の理想を見てやってくれ…リオン。」

そう一刀が言うと三人が意識を取り戻す。

「ちょ、ちょっと待って下さい、ご主人様!!」

一刀に言葉を掛けたのは、愛紗だった。

「えっ、どうしたの？愛紗。」

「どうしたの？じゃありません!!我々の断りも無しにリオンを引き込まないでください!!」

聞いてきた一刀に、怒鳴る愛紗。

すると、そこに…

「えっ？私は別にいいよ、リオン君と一緒に来てくれるって言うなら…」

「鈴々も別に構わないのだ。」

桃香と鈴々がリオンの同行に賛同する。

「なっ!?!り、鈴々!!リオンは桃香様の理想を夢物語と言って侮辱したんだぞ!!」

「にゃ…鈴々はもう別に気にしてないのだ。それに、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいつて言うなら、それに従うのだ。」

鈴々に自分の意見に同意して欲しかった愛紗は、桃香の理想を侮辱

した事を持ち出したが…鈴々は、もう気にしてないと答えた。
するとそこに…

「…なあ、愛紗。」

一刀が話し掛ける。

「リオンの力は、桃香や愛紗達が目指している理想に近付くためにも必要なんだよ。俺からも頼むよ、愛紗。」

そう言つて頭を下げる一刀。

「そ、そんな風に簡単に頭を下げないでください！？そ、それに私は貴方を新たな主人としたんですから…い、否はありません／＼」

恥ずかしがりながらも、一刀の言葉に賛成した愛紗。

「ありがとう、愛紗…リオン、それじゃあ宜しくな。」

愛紗に感謝の気持ちを込めて言った後、リオンに向かって言葉を放つ。

「…フツ、お前達が何処までやれるか、お手並み拝見といこうではないか。」

こうして桃香、愛紗、鈴々の三人は管輅の占いの導きにて、天の御遣いと漆黒の剣士の協力を得ることが出来た。
ここにまた、新たな外史が生まれる。

第二話 漆黒の剣士（後書き）

更新のスピードが段々と遅くなるでしょう。

この時期、私は忙しいんですよ。就職の事でいろいろと…

次回…

第三話『桃園の誓い』をお楽しみに。

第三話 桃園の誓い（前書き）

第一話と第二話に比べ、短くなってしまいました。

第三話 桃園の誓い

「何故だ…」

一刀が呟く。そして…

「…どうして僕がこんな事を、しなければならんだ…」

リオンも呟いていた。その理由が…

「何故、俺（僕）は皿洗いなどしてるんだ…」

皿洗いをさせられていた。

～時は少々遡る～

リオンの勧誘に成功をした桃香達と一刀は、話し合いも兼ねて、ごしらえの為に楼桑村の飯店に入っていた。

シャルティエからリオンの世界を聞いて（桃香達にはシャルティエが話したのを一刀から伝えて）、一刀は改めてリオンは自分の世界の人間では無い事を知った。

「（モンスターや魔法のある世界だなんて…まるでRPGみたいだな。）」

そう思う一刀であった。

やがて、リオン達の座っていたテーブルに色々な料理が並んだ。

「おお〜！！美味しそうなのだ…いったただきま〜すなのだ。」

そう言つて鈴々が料理を食べ始めたのを後に、他の桃香と愛紗、そして一刀が料理を食べ始めた時…

「ところで、劉備達はちゃんと金を持っているのか？」

リオンのその一言に、桃香達が食べる手を止める。

「えっ？…ちよつと、まさか…」

桃香達が止まった理由を察した一刀も食べる手を止める。

「え、えへへ…だって、天の御遣い様だったらお金も沢山持つてるんだって思つて…」

「お、同じく…ノノ」

「えっ？お兄ちゃんの奢りじゃ無かったの？」

桃香達はどうかやら天の御遣いである一刀に、期待していたようだ。

「い、いや…俺、金なんて全然持つて無いから！？リオンは…」

桃香達の狙いが分かった一刀は、慌てて否定をした後にリオンを向くが…

「異世界から来た僕が、この世界の金を持つているはずが無いだろう。」

と、断言した。その時…

トットツ…

と言つ足音が聞こえてきた。

「ほう…つまりあんた達は、無銭飲食をしようとしてたのかい。」

足音の正体は、この店の女将であった。

く戻つて現在く

『まあ、無銭飲食ならば仕方ないですよ…』

シャルティエの声が聞こえてきた時…

「ご主人様く、リオン君く」

桃香が入り口の所から顔を出していた。

「ああ…どうしたんだ？桃香。」

一刀が桃香に返事をする…

「何か手伝える事つて無いですか？」

と、言つて出てきた。するとリオンは…

「おい、劉備！！今僕の事をなんと呼んだ！！！」

桃香に向かって怒鳴っていた。

「えっ？リオン君だけど…何かいけなかったかな？」

桃香は一体何故、リオンが怒っているか分からずに首を傾げている。

「何だその子供のよ様な呼び方は！！…僕の事は呼び捨てで呼べ！
」！

どうやらリオンは、桃香が君付けで呼ぶのが気に入らないらしい。

「ええ、私が呼びやすいと思ったから呼んでるんだけど…それと私の事は桃香って呼んで良いんだよ。」

桃香はどうやら、呼び方を変えるつもりは毛頭ないようで…リオンに真名で呼ぶ事を許可する。

「…その名は信頼した者しか呼んではいけないのだから…別に僕がそんな名前ですら呼ぶ必要は無いだろう。」

因みにリオンは、真名の意味を一刀から聞いているので大切さが分かり、真名は言わないようにしていた。

「うん…少なくとも私は信頼してるんだけどなあ…」

「お前が信頼をしても、関羽や張飛が僕を信頼していないだろう。」

桃香の言葉にすぐさま理由を返すリオン。

「確かに…鈴々はともかく、愛紗はあまり信用をしていない感じだ

ったしな〜。」

「一刀がそんな風に口を挟んでいると…」

ゴンツッ！…

「アデッ（ぐっ）！！」

「一刀とリオンの頭に酒瓶が当たった。
振り向くとそこには…」

「無駄口叩いてる暇があんなら、手を動かさな！…あんたら一体何でこんな事してるのか分かってんのかい？」

女将が立っていた。

「…俺達が食べた分の代金分を働いて返すことです。」

「一刀がそう返したのに対し、リオンは…」

「ちよつと待て、北郷！！僕は何も食べてはいないぞ！！」

「一刀に反論をしている。そこに女将が割り入って来た。」

「何を言うんだい！！アンタもあの席に居た時点で、他の四人と一緒なんだよ。」

「なっ！？」

女将の突然の乱入に言葉が詰まるリオン…そして、そのまま皿洗い続けた。

『ぼ、坊ちゃんが気迫で押されるなんて…すごい人だ…』

リオンの事を一番によく知っているシャルティエが、小さく呟いた。しばらくして…リオン達は女将から直々に、仕事完了の報せを聞かされて、無事に解放された。

そして店を出ようとしていた桃香を女将が呼び止めた。そして…

「ホレッツ！持って行きな！！」

酒瓶を桃香に向かって投げた。

「わわわ！！？」

桃香は慌てて酒瓶を受け取る。

「あのお…これは？」

桃香がそう聞くと女将がニツと笑って言った。

「あの黒い髪の娘から聞いたよ。あんた達…若い年でそんな大きな事をやるうとしてたなんて…」

あたしもあんた達の事を応援してやるから、頑張ってきたな！！その酒はその証さ。」

女将の応援を受けた桃香は、満面の笑みを浮かべて…

「はい！ありがとうございます！！」

そう返事をして四人の後を追って行った。

くしばらく歩いて…く

「わあ…綺麗…」

桃香がそう言葉を漏らす。

桃香達が辿り着いたのは、辺り一面の桃の花が咲いている庭園の中だった。

「確かに…これほど立派な桃園は私も初めてです。」

「桃、桃、桃でいっぱい綺麗なのだ!!」

愛紗と鈴々が同様に感想を述べる。

…因みに一刀は、ゼエゼエ…と息を切らしていた。

「…それで、お前達はここで何をするつもりなんだ？」

リオンがそう疑問をぶつけると…三人は盃に酒を注ぐ。

「まあ、言つなれば…“桃園の誓い”…」

そう愛紗が言うと、盃を天に掲げ、口を開く。

「我ら三人、姓は違えども姉妹の契りを結びしからは!」

愛紗の言葉に続くように、鈴々が盃を掲げる。

「心を同じくして助け合い、力の無い人々を救い！」

鈴々の言葉を最後に、桃香が盃を掲げた。

「同年同月同日に産まれることは得ずとも……」

桃香は一旦、言葉を止め……三人同時に口を開く。

「……願わくば同年同月同日に死せんことを……！」

“桃園の誓い”をここに宣言した。

「……。」

一刀とリオンはその光景を無言で見っていた。
そして、一刀も盃に酒を注いで三人に近づいた。

「おい、リオンも来いよ！」

三人に近づいた一刀が、リオンも来るように促す。

「……何故僕が、そんな所に行かなければいけないんだ。」

リオンが一刀に反論をした。

「だって、リオンも大切な仲間だろ。」

一刀がさも当たり前のように言う。その言葉に桃香はうつんと頷き、愛紗は少々呆れて、鈴々は笑顔のままだった。

『坊ちゃん…何となく一刀は、スタンに似ていますね…』

シャルティエが一刀にスタンの面影があると感じた。

「やはりシャルも、あいつがスタンと同じだと思ったか…」

リオンもシャルティエに同意の声を上げる。

『坊ちゃんの苦手なタイプが、こんな所にいるなんて…』

「それが、一人だけならいいのだがな…」

リオンはそう言って、桃香の方向を向いた。

「？リオン君、早く来てよ。」

見られた桃香は、見られた訳が分からず…ただ笑顔で来ることを促した。

『た、確かに…桃香も坊ちゃんに苦勞をかけそうな感じですね。』

シャルティエがリオンの気持ちを察して、呟いた。

「…まあ、僕が居なければあいつ等は何も出来ないだろうからな。」

そう言ってリオンは、前髪を手で払う。

「さて…行くか、シャル。」

『はい。』

リオンはシャルティエの返事を聞くと、一刀達に向かって歩きだす。

そして…リオンが来たことを確認すると、一刀は盃を掲げる。

「乾杯!!」

因みにリオンは酒は飲めないなので盃はなく、代わりにシャルティエを掲げた。

「…で、これからどうするんだ？」

一刀が桃香達に質問をする。

「そうですね…やはりどこかの国に取り入れて貰って、そこから上がって行くのが正道だと思います。」

三人を代表をして愛紗が答えた。

「だが…僕達を取り入るような所にお前は心当たりがあるのか？」

「そ、それは…」

リオンのその問いかけには、愛紗も言葉を詰まらす。するとその時…

「アツーーーーー!!!」

桃香がいきなり大声を上げた。

「ど、どうしたんですか!? 桃香様…」

いきなり大声を上げた桃香に、愛紗は驚いて質問する。

「思い出したよ!!! 確かこの辺りに白蓮ちゃんが赴任しているって言うってたよ!!!」

「…あ、あのさ桃香…それって真名なんじゃないの？」

騒ぎ立てる桃香に、一刀は少々慌てながら『白蓮』が誰かを聞いてみる。

「あつ、ごめんねご主人様…んと、白蓮ちゃんは名前を公孫讚、字を伯珪って言う人で私の小さい頃の友達なの。」

桃香は落ち着きを取り戻し、改めて説明する。

「桃香様…真名を交換する仲でありながら、忘れてたいたのですか？」

「うっ…ワ、ワスレテナカッタヨ」

愛紗が呆れて聞いてきたのに対して、桃香は明らかかな棒読みで答えた。

（ ）（ ）（絶対忘れてたな…）（ ）

そう思う四人であった。

「と、とにかく…白蓮ちゃんなら私達を受け入れて貰えると思うよ。」

桃香が周りの空気を変えようと、話を続ける。

だが…

「この乱世の中、まともな兵力を持っていない僕達を本当に受け入れると思うか？」

リオンのその一言に、黙り込む一同。

「確かに、資金も無く、兵を持たない我らでは…リオンの言う通り、いかにご友人でも受け入れてくれるか…」

愛紗も現実の状況で考えて、難しいと考える。
しかし…

「…資金なら何とかなるかも知れんぞ。」

リオンのその一言に、リオンに目を向ける四人。

「資金がどうにかなるって…どうしてだ？リオン。」

一刀がリオンに聞くと、懐から袋を取り出す。
中を見ると…少々、ヒビの入ったダイヤ型のガラスの物体のようなものと、ヒビの入っていない綺麗なガラスの物体が入っていた。

「わあ〜綺麗。」

「これは…宝石か、なにかか？」

「これ、透明で向こうがスケスケなのだ。」

桃香達はそれぞれ取り出し、感想を述べる。

「なあ…リオン、あれって何なんだ？」

一刀がそう聞き出す。

「あれは、『レンズ』だ。僕達の世界にある物で、あれを換金して僕達は資金を儲けていた。」

『因みに、ヒビの入った物が『ラフレレンズ』：入っていない物が『クリアレンズ』です。』

リオンの説明を後に、シャルティエがレンズの種類を教える。

「この世界でも…宝石の一種として売れば、多少の金額にはなるだろう。」

そう、リオンはこんな風に考えていたのだ。

本来、レンズの換金をするためには…レンズを使って製品を造っていたオベロン社が買い取っていたのだ。

そのオベロン社もこの世界には存在しないと考えたリオンは、持っていた不要な数のレンズを、宝石がわりとして売ることにしたのだ。

「まあ…この世界の人間にとっては、ああ言った物は珍しいからな。」

一刀の言う通り、この世界の人々にはガラスで出来たような物は珍しいのである。現に、桃香達もレンズをまじまじと見ていた。

一刀は桃香達にリオンの案を話すと、快諾をした。そして、そのレンズを売った資金を元に志願兵を募集した。

そして…集まった志願兵の中では、天の御遣いと漆黒の剣士の名前に惹かれ、入った人が断然多かった。

「よし、それじゃあ…白蓮ちゃんの所に向けて、出発しんこーだよー！」

桃香が指を立てて、全員に出発を宣言した。

そして、そんな時…

（一体、何故僕はこの世界に来てしまったのか？）

そんな事を考えるリオンだった。

第四話 英雄として（前書き）

すいません。遅くなった上に、全然違う題名になりました。変わる事もあるので、次回予告は無しにします。後、今回は自分の世界を描いています。

第四話 英雄として

「あつ！お城が見えてきた！！」

義勇軍の先頭を歩いてきた桃香が、目の前に現れた城を指差した。その後続いたのは、義姉妹である愛紗と鈴々。『天の御遣い』となった北郷一刀。そしてこの世界で『漆黒の剣士』と言われたリオン・マグナスである。

「もしかしてあれが…」

桃香の隣に立っていた愛紗が呟く。

「うん！あれが白蓮ちゃんが赴任している所だよ。」

桃香が愛紗の呟きに答える。

「フツ…当前だが、やはりダリルシェイドとは比べ物にらんぐらいに小さいな。」

今度はリオンが呟く。

「ダリルシェイド？そこってリオンが居た前の世界の街の名前か？」
リオンの言葉に疑問をぶつける一刀。その言葉を後に他の三人もリオンに目を向ける。

「…まあ、そんなところだ。」

リオンはそう言って、視線をそらす。

「へえ、一回見てみたいのだ。」

鈴々がそんな事を言っていると…

「それより、さっさと行くぞ。」

リオンが先に行くことを促した。

「ちよ、リオン君待つてよ。」

そう言って桃香は後を追っていき、更にその後を一刀達が追い掛ける。

くしばらくして

城の門の前まで来た一刀達は、門番に止められていた。

「待て！お前達…一体何処の部隊だ？どうしてこの城にやって来た？」

門番の兵士が桃香達に質問を投げ付ける。

「えつと…私たち、このお城の太守の公孫賛って言う人会いに来たんですけど…」

桃香が代表して兵士に返答をした。しかし、兵士は厳しい顔で睨みつける。

「大守様に？…何故大守様に会われるんだ？」

兵士がその質問をしていると…

「…どうしたのだ？」

兵士の後ろから蒼い髪をした女性が現れた。

「あっ！？これは、趙雲將軍…実は、こやつらが大守様に会いたいと言ってきて…」

兵士は状況を説明する。その説明を聞いた趙雲は、引き止められていた桃香達を見る。

「…ほう。」

趙雲は特に一刀とりオンを見て、小さく頷く。

「失礼ながら…その二人の御仁は噂になっている、天の御遣い殿と漆黒の剣士殿で違いはないか？」

趙雲の問い掛けには一刀が答える。

「うん、まあ…そう言われてる…それより君の名前って趙雲子龍で間違いないのかな？」

「…ほう、初めて会ったあなたが私の字を知っているとは、それはあなたの天の知識と見てよろしいかな？」

趙雲は自分の字を言われた事に驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻して新たに質問をする。

「ああ、趙雲は俺の世界では有名だからさ。」

その言葉を聞いた趙雲は…

「フフツ、左用か…中々に面白い人だ。」

微笑みながら返答をした。そして…

「この者達を通してやれ。伯珪殿には私から言っておいてやろつ。」

その趙雲の言葉を聞いて、兵士は自分の立ち位置に戻る。

「さあ、お通りください。」

趙雲はそう言つと城の方向に歩いて行つた。

「…おい、北郷。あの女はお前の世界で有名となっていたのか？」

リオンが一刀を立ち止まらせて質問する。

「…えっ？う、うん。…でも正しくはあの人の名前が俺の世界では有名なんだよ。」

「名前だと…あいつ自体では無いのか？」

一刀の言葉にまたもやりオンが質問をする。

「俺の知っている限りの知識では、趙雲は男のはずなんだ。そして劉備達も…」

そう告白する一刀。

「…成る程、この世界はお前の世界によく似た別の世界になるな。」

「ああ…でも、だったらどうしてリオンはこの世界に来たんだ？」

リオンは、自分が今居る世界がどうゆう所か分かり領き、

一刀は全くの別世界に居たりオンが何故この世界に居るのか疑問に思った。

「そこまでは僕も分からない。僕だって考えていたんだからな。」

『本当に…どうしてこんな所に来たんでしょう？』

リオンは自分でも分からない事を話し、シャルティエが同調していた時…

「お〜い、ご主人様〜…リオン君〜…早く来てよ〜。」

既に先に進んでいた桃香に、早く来るように促された。

「…まあ、そうゆう事はまた後になって考えよう。桃香達も待っているから行こう、リオン。」

「…フン。お前に言われるまでもない。」

一刀は共に行く事を誘ったが、リオンは冷たくあしらひ、さっさと先に行っていった。」

〈公孫贇城 宮殿前〉

「さて、私はこれから伯珪殿にあなた達の事を伝えに行くが…何か特に伝えて欲しい事はおありか？」

宮殿前に待っていた趙雲がそう聞いてきた。

「あつ、えつとじゃあ…『劉備が会いに来た』って伝えてください。」

「うむ、承知した。」

桃香から言伝の内容を聞いた趙雲は宮殿の中に入って行った。

「…それにしてもあの者、武に関しては相当な実力者だな。」

「…うん、立ち姿から言っても全然隙が無いのだ。」

愛紗と鈴々が立ち去った趙雲の事について話し合っていた。

「ほえ？愛紗ちゃん、鈴々ちゃん…あの人、そんなに凄い人なの？」

武に関しては殆ど皆無の桃香は、二人に実力を聞く。

「はい。武に関してならば、私や鈴々と同じぐらいだと思います。」

桃香の問いに愛紗が答えた。

「へえ…じゃあ、リオン君ではどうなのかな？」

桃香がそう言っリオンに目を向ける。

「…さあな。」

リオンはそれだけ言った。

「へえ…あ！ねえねえ、ご主人様。ちよつといいかな？」

「え？何？」

桃香に突然、話しかけられて一刀が答える。

「ご主人様、あの趙雲さんと話してた時…趙雲さんがご主人様のいた世界では有名だって言ってたよね。」

「う、うん。」

一刀は桃香に対して頷く。そして、その言葉を聞いた愛紗や鈴々も近くに寄る。

「だったらさ…私たちのことって、ご主人様の世界じゃ有名なのかな？」

桃香のこの問いに一刀は自信を持って答える。

「ああ、劉備達三人は趙雲を越えるほど有名だよ。…なにせ英雄って言われる程なんだから。」

「ええ、英雄!!?」

「にははは、英雄なのだ。」

一刀の言葉に桃香と愛紗は驚き、鈴々は英雄と呼ばれた事に笑っていた。

「そそ、そんな…え、え、英雄って…いくらなんでも言い過ぎだよ。」
「そそそ、そうです。まだ国の為に何もやってない私たちなんか…」

桃香と愛紗は驚きを隠せずにしたが、一刀は落ち着いて話す。

「まあ、確かに今の桃香達を英雄とは呼べないけど、でも桃香達はこれからもっと大きくなるだろうし、きっと英雄と呼ばれるようになる」と俺は考えてる。」

その言葉を聞いた鈴々は…

「うん！そうなのだ。お姉ちゃんが皆にいいことを沢山して、愛紗と鈴々が悪い奴らをやっつけていけばいいのだ。」

鈴々はそう言って胸を張る。

その姿を見た二人はくすり、と笑い…

「そうだね。悪い人達から弱い人達を救っていったら、確かに英雄って呼ばれるようになるかもね。」

「ええ。」

と、鈴々の言葉に同意する二人。
すると桃香は…

「じゃあ、ご主人様やリオン君はもしかしたら『英雄達と共に歩いた天の御遣いと漆黒の剣士』なんて言われるかも。」

そんな事を考えていた。

「い、いや…英雄って言われるのは桃香達だけだろうし、俺なんて…」

そう一刀は否定をしたが愛紗は…

「なにを言われるのです。貴方は私たちの主となった人なのですよ。英雄の主が、その英雄と同じように言われてなければおかしいですよ。」

と、強く言い切った。

その話を一部始終聞いていたリオンは…

「（……英雄、か）」

そう、ひそかに思った。

『坊ちゃん…あんな事がなければ、坊ちゃんだってきっと英雄に…』

シャルティエが一刀に聞こえないように喋る。

「いいんだ、シャル。…僕は、あの結末を覚悟していたんだから。」
『坊ちゃん…』

リオンの言葉の後に、シャルティエが呟く。

ヒューゴの反乱とマリァンの人質。

これが必要ならばリオンはきっと、世界を救った英雄として存在していただける。

「それに、ヒューゴ達はきつとスタン達が止めているさ。」

そう言っつてリオンは少し微笑む。

『そうですよね。スタンはともかくとして、ディムロス達…ソージェイアン達が居ますから。』

シャルティエも少し明るく喋る。

『あ、もしかしたら…坊ちゃんもここでなら、英雄と呼ばれるかもしれないですよ。』

シャルティエのその言葉にリオンは…

「…フツ、僕はそんな称号などに興味は無い。他の奴らがなんと言つても、僕は気にしない。」

そう言っつていると…

「よう桃香、久しぶりだな。」

城の中から赤いポニーテールの女性が、趙雲と共に出て来た。

第四話 英雄として（後書き）

恋姫の短編でも書きたいな〜とか考える今日この頃…ま、かなり時間掛かりますが、ちよつとずつ進めて行きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7153m/>

Tales of Destiny ~ 漆黒の剣士と天の御遣い ~

2010年10月24日13時53分発行